

佐藤 健一の一一代記

2026年

第一章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

長岡の冬は雪が深い。毎朝玄関を開けると自分の背丈ほどの雪の壁が目の前に現れるのが、子どもの頃の当たり前だった。雪かきは子どもの仕事で、小学校低学年の頃からスコップを手にした。重い雪を何十回も投げると体力がついた。今から思えば、あの雪かきが営業で鍛えた体の底力の原点だったかもしれない。

父は地元の金物屋を営んでいた。商売人の父は愛想がよく、どんな客にも笑顔で接していた。夕方になると店先から父のよく通る声が聞こえてきて、私はそれを聞きながら宿題をした。人と話すことを苦にしない体質は、生まれつきのもものと環境の両方で作られた。母は算盤が得意で、帳簿をつけながら三人の子どもを育てた。「お母さん、算数教えて」と言いに行くと、算盤を横に置いてわかりやすく説明してくれた。

三人きょうだいの長男だった私は、小学校時代は野球少年だった。休みの日には朝から空き地に集まり、日が暮

れるまでボールを追いかけた。グローブを買ってもらった日のうれしさは今でも覚えている。使い込んで柔らかくするために油を塗って布団の下に敷いて寝た。翌朝起きてグローブを広げたときの感触が、今でも指先に残っている気がする。

中学では成績は中くらいだったが、弁が立つとよく言われた。生徒会の選挙演説で拍手をもらった瞬間の興奮は、数少ない輝かしい記憶のひとつだ。その頃から人前で話すことへの苦手意識がなくなった。



※実際の本には、ご本人やご家族の写真が入ります。

夕暮れの商店街に行くイメージ

第二章 学生時代

(12～22歳ごろ)

高校では弓道部に入った。矢を放つ瞬間の、周囲の音が消えるような静けさが好きだった。その静けさが、後年、商談の直前に一呼吸置く時間に似ていると気づいた。弓道が営業の修行になっていたとは、当時は思いもしなかった。

三年生の秋、就職担当の先生に呼ばれた。「東京に行けば、お前の口の上手さが生きる仕事がある」と言われた。食品メーカーの求人票を渡されたとき、胸が高鳴った。長岡という地元の枠を超えて、違う場所で自分を試したかった気持ちが、背中を押した。

卒業式の翌日、父が「人に迷惑をかけるな」とだけ言った。短い言葉だったが、その重さは今でも残っている。夜行列車で東京へ向かう夜、窓の外を流れる街の明かりを見ながら、怖さより期待の方が大きかった。隣の席の見知らぬ同い年の青年と話が弾んだ。その場かぎりの会話だったが、上京の夜の高揚感とともに記憶に刻まれて

いる。

東京での最初の一年は慣れないことばかりだった。アパートの六畳間に布団と小さな机だけ置いて、初出勤の朝に鏡の前でネクタイを何度も結び直した。研修では礼儀作法から始まって、先輩の外回りに同行した。人と話すことは得意だったが、仕事として断られる経験は別物だった。それでも、向いていると感じる瞬間が確かにあった。

サンプル — 実際の本は、ご本人のお話からAIが文章を生成します

実際の本は全6章構成です

第1章 幼少期・生まれ育った場所

(0～12歳ごろ)

第2章 学生時代

(12～22歳ごろ)

第3章 仕事・青年期

(20～40歳ごろ)

第4章 恋愛・結婚

第5章 子育て・家族

第6章 今の思い・家族へのメッセージ

(現在)

このサンプルは第1章・第2章のみ収録しています。